

韓国語のテンス・アスペクトの研究-日韓対照言語学 の観点から-

著者	若生 正和
号	3
学位授与番号	37
URL	http://hdl.handle.net/10097/36881

わか　　う　　まさ　　かず
若　　生　　正　　和

学位の種類　　博士（国際文化）

学位記番号　　国博　第　37　号

学位授与年月日　平成16年　3　月25日

学位授与の要件　学位規則第　4　条第　1　項該当

研究科・専攻　　東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期　3　年の課程）
国際文化交流論専攻

学位論文題目　　韓国語のテンス・アスペクトの研究
— 日韓対照言語学の観点から —

論文審査委員　　（主査）

教授 堀 江　　薫　　教授 吉 本　　啓
教授 佐 藤　　滋
教授 小 野 尚 之
助教授 姜　　奉 植（岩手県立大学）

論 文 内 容 の 要 旨

第 1 章 序 論

本研究の主な目的は、韓国語のテンス・アスペクト形式の意味・機能を記述・分析することにある。テンス・アスペクトはともに時間と関係する意味・機能を表現するための文法形式である。簡潔に述べるなら、テンスは言語により表現される出来事の時間的位置について言及するものであり、アスペクトは言語により表現される出来事を発話者がいかに把握しているかを表す文法カテゴリーである。

人間はある出来事が時間の流れの中でどのように展開するかを認知し、言語表現に反映させている。あるいは、ある出来事に関して、時間軸にそって展開される過程の中のどこか一部分にだけ焦点を当てて認知し、表現したり、そのような時間軸上における展開過程には焦点を当てず、出来事全体をひとまとまりとして把握し、表現することもある。これらはいわば、文により表現される出来事に関して、時間の流れと関連づけてどのように認知し、どのように言語化するかということに

関わっている。これを言語学研究ではアスペクトと呼ぶ。

本研究の主な研究対象は、韓国語のテンス・アスペクト表現であるが、韓国語に関しては、上に上げた諸研究をはじめとして、膨大な先行研究が存在する。これらの研究は大半が韓国人研究者の直観に根ざした記述がなされており、テンス・アスペクト表現の意味・機能に関しては、テンスを認めるか否かなどの立場は研究者ごとに異なるにしても、かなりの部分明らかにされてきたと言える。しかし、ある言語を記述・研究するに当たって、他の言語の研究から得られる知見を参考にしたり、2つ以上の言語を比較・対照することによって、単一言語の記述からは得ることが難しい事実を明らかにすることができる。本研究で主な比較の対象となるのは日本語であるが、複数の言語を比較し、その共通する部分を取り上げて考察することにより、個別言語の研究にとどまらず、一般言語学へ寄与することが可能になる。

本研究は、日本語研究から得られる知見を導入し、あるいは本研究の調査結果と日本語研究から得られた結果を比較・対照することにより、これまで韓国語を単独で扱っていた先行研究ではあまり取り上げられてこなかった事実を明らかにすることを目的としている。また、日韓両言語のテンス・アスペクト表現に関する比較研究から得られた結果を、一般テンス・アスペクト論の視野から光を当て、考察することも重要な目的の一つである。本研究の議論の土台となる用例は、計算機で処理可能な形で構築されたテキストデータから抽出したものであり、現実の言語運用を反映したものである。この生きた用例に対して、本研究では日本語との比較を通じて詳細な分析を行っている。第2章は研究の必要上、先行研究により指摘されてきた現象に言及しながら韓国語のテンス・アスペクト表現について概観しているが、第3章、第4章での分析はテキストデータをもとにした実証的なものである。

本研究の構成は次の通りである。第2章では、先行研究を参考にしながら、日本語と韓国語のテンスとアスペクトについて概観し、韓国語のテンス・アスペクト形式の意味・機能を日本語と対照しながら考察していく上で必要な、認知的基盤を提供する。第3章では、韓国語の情景描写テキストにおけるテンス辞の機能について分析・考察する。第4章では、韓国語動詞のアスペクト形式‘V-ko iss-ta’のパーフェクト的な用法を取り上げる。最後に、第5章で本研究のまとめを行い、今後の研究の展望について述べる。

第2章 日本語と韓国語のテンス・アスペクト体系の概観

韓国語に関して、文法が日本語とよく似ていると言われることがよくある。基本的な語順が「主語・目的語・述語」であり同じであること、語順の入れ替えが比較的自由なこと、格助詞の存在などが、韓・日両言語の文法が似ていると言われる理由として考えられる。

テンス・アスペクトの領域においても、韓・日両言語には共通点・類似点を見いだすことができ

る。テンスに関する共通点としては、過去対非過去の対立をなすことをあげることができる。アスペクトに関しては、日本語には進行相や結果状態相を表すアスペクト辞「-てい-」が存在するが、韓国語にはこれに対応するアスペクト辞として‘-ko iss-’（進行相・結果状態相）と‘-e iss-’（結果状態相）が存在するという点で似ていると言える。

しかし、両言語のテンス・アスペクトには相違点も少なからず存在する。日本語では単純非過去形「V-ル」と単純過去形「V-タ」がアスペクト的には完成相（perfective）を表すのに対し、韓国語の単純非過去形‘V- \emptyset -nta’と単純過去形‘V-ess-ta’は、それぞれ完成相的にも用いられるが、同時に参照点上において継続中の動作を表すこともでき、進行相を表す‘V-ko iss-ta’形とはほぼ同じ意味を表す場合もある。つまり、韓国語の単純非過去形・単純過去形をアスペクト的に完成相表現としてみなすことは難しく、日本語と単純に比較できない面がある。

また、韓国語の過去テンス形‘V-ess-ta’は進行相・過去の他にも結果状態相・現在を表すと見られる場合があり、その意味・機能を一般的にテンスを論じる際に問題とされる発話時と出来事時の関係のみで単純にとらえることはできない。

本章では韓国語のテンス・アスペクトと、本研究において比較の対象となる日本語のテンス・アスペクトについて、先行研究を参考に概観し、それと同時に、韓国語・日本語のテンス表現・アスペクト表現の対照を行い、両言語のテンスとアスペクトの特徴を明らかにした。

2.2節から2.4節では、テンスについて概観している。人間は発話する文によって提示される出来事を時間と関連づけて把握している。状況と時間との関連づけの仕方は大きく2通りに分けられる（Comrie 1985）。一つは時間の流れを直線と考え、その直線の上に状況を配置する方法である。この場合、状況が配置される点（あるいは領域）とは別に、もう一つ別に特定の点または領域が必要となる。この特定の点（領域）との関連づけによって、発話される状況の時間的位置を把握することができるようになる。テンスとはこのように、ある特定の点（領域）と関連づけながら状況を時間軸上に配置することである。

Reichenbach (1947) は発話時S、出来事時E、参照点Rを導入し、アスペクト形式をも含めた英語の時間表現が提示する時間関係について分析しており、日本語研究においては、Soga (1983) が日本語のテンス・アスペクト形式が表す時間関係を同様に、S、E、Rの先後関係としてとらえ、提示している。2.4節では韓国語のテンス辞を中心とした時間表現の意味・機能を確認し、Reichenbach (1947) とSoga (1983) の図式を参考に、各時間表現が表す発話時、参照点、出来事時の先後関係からなる構造を図式化した。また、その図式をもとに、主に日本語との対照を通じて、韓国語のテンス体系の特徴を指摘した。

Se, Ceng-Swu (1996) は韓国語のテンスは過去対非過去の2項対立であり、接尾辞‘-ess-’が過去テンスを表し、音型を持たない接尾辞‘- \emptyset -’が非過去テンスを表すとしている。この主張に

従うなら、韓国語のテンスは日本語のテンスとよく似た体系であることが予想される。一方で、主に接尾辞 ‘-ess-’ が過去の出来事を表すというテンス的な側面だけではなく、「完了」といったアスペクト的な性格が強いとして、韓国語にはテンスは存在せず、アスペクト（相）の体系のみが存在するとする主張もある（Nam, Ki-Sim 1972）。多くの研究者は ‘-ess-’ に過去テンスを表す機能を認めており、このことから本研究では基本的に韓国語にテンスが存在するという立場をとることとする。しかし、韓国語にテンスの存在を認める韓国語文法研究者の多くも、同時に ‘-ess-’ のアスペクト的機能や、発話時に関連づけられた出来事を表すことがあるという事実を指摘している（Nam, Ki-Sim and Ko Yeng-Kun 1993、伊藤 1989、1990、Se, Ceng-Swu 1996、Sohn, Ho-Min 1999）。

(1) 정확는 지금 공부한다.
 Cenghwa-nun cikum kongpwuha- \emptyset -nta.
 -TOP 今 勉強する - \emptyset -DECL
 「チョンファは、今、勉強している。」

(2) 정확는 내일 출발한다.
 Cenghwa-nun nayil chwulpalha- \emptyset -nta.
 -TOP 明日 出発する - \emptyset -DECL
 「チョンファは、明日、出発する。」

まず、非過去テンス辞とされる ‘- \emptyset -’ の意味を確認すると、(1)、(2)のように発話時において展開されている状況を表す場合と、発話時に後続して発生する状況、つまり未来を表す場合がある。ここで注意が必要なのは、韓国語においては動作を表す動詞が ‘- \emptyset -’ をとった場合も発話時において継続中の動作を表すことができる点である。これは、現在テンスを表すことができず、完成相を表す日本語動詞の非過去形「V-ル」と異なる点である。日本語と比較した際、このような相違点は存在するが、‘- \emptyset -’ が表す時間構造は 〈S,R,E〉 および 〈S-R,E〉 の2通りである。

(3) 정확는 어제 도서관에서 공부했다.
 Cenghwa-nun ecey tosekwan-eyse kongpwuha-yess-ta.
 -主題 昨日 図書館-DECL 勉強する -ess-DECL
 「チョンファは、昨日、図書館で勉強した。」

(4) 나는 그 때 도서관에서 공부했다.
 Na-nun ku ttay tosekwan-eyse kongpwuha-yess-ta.
 私-TOP その 時 図書館-LOC 勉強する -ess-DECL

「私はその時図書館で勉強していた。」

- (5) 정화는 예쁜 옷을 입었다.
 Cenghwa-nun yeppu-n os-ul ip-ess-ta.
 -TOP 美しい-ADN 服-ACC 着る-ess-DECL

「ジョンファはきれいな服を着た/来ている。」

過去テンス辞‘-ess-’は基本的に(3)、(4)のように過去テンスを表す。過去テンスにおいても、進行相を明示するアスペクト形式‘-ko iss-’を用いることなく参照点R上で継続状態にある動作を表すことができる点が日本語の過去テンス辞「-タ」と異なるため、アスペクト的に完成相形式と見ることはできないが、時間構造としては〈R,E-S〉とまとめることができる。また、‘-ess-’には(5)のように結果状態相とほぼ同じ意味を表す場合や、動作パーフェクト的に用いられる場合もあるが、このようにアスペクトの意味が前面に出る場合の時間構造は〈E-R,S〉とまとめることができる。

韓国語には大過去を表す‘-essess-’もあり、このテンス辞により表現される時間構造は〈E-R-S〉となるが、以上確認した‘-ø-’、‘-ess-’とともに、対応する日本語の時間表現とともに表にまとめると表1のようになる。

表1 韓国語の時間表現と対応する日本語の時間表現

時間構造	韓国語の表現	名称	日本語の表現/名称
S, R, E (1)	V-ø-nta	単純非過去	V-ル/単純非過去
S-R, E (1)			
R, E-S (1)	V-ess-ta	単純過去	V-タ/単純過去
E-S, R (1)	V-e iss-ta	結果状態相・非過去	V-テイ-ル/結果状態相・非過去
S-E-R (1)	V-ko iss-ta V-ess-ta		
E-R-S (1)	V-e iss-ess-ta V-ko iss-ess-ta	結果状態相・過去	V-テイ-タ/結果状態相・過去
E-S, R (2)	V-ess-ta	動作パーフェクト・非過去	V-テイ-ル/経験相・非過去
S-E-R (2)	V-ess-ta		
E-R-S (2)	V-essess-ta	大過去	V-テイ-タ/経験相・過去 t
S, R, E (2)	V-ko iss-ta V-ø-nta	進行相・非過去	V-テイ-ル/進行相・非過去
S-R, E (2)	V-ko iss-(ul kesi-)ta		V-テイ-ル(トオモウ)/進行相・非過去
R, E-S (2)	V-ko iss-ess-ta V-ess-ta	進行相・過去	V-テイ-タ/進行相・過去

2.5節から2.7節では、アスペクトについて概観した。テンスが発話時と出来事時、あるいは発話時と参照点、出来事時の間に成立する時間構造を示すための形態論的範疇であるとすると、アスペ

クトは、動詞が描き出す、出来事の内的な構造に着目するものである。2.5節では、アスペクトを考える上で基本となる完成相／非完成相、瞬間的／継続的、限界的／非限界的の諸概念を確認し、2.6節では日本語のアスペクトについて概観した。その上で、2.7節では Vendler (1967), Shirai (2000) を参考にしながら、[± dynamic]、[± telic]、[± punctual] の素性の組み合わせにより韓国語動詞を動作動詞、達成動詞、到達動詞、状態動詞に分類する方法を提示した。

第3章 韓国語時制辞の時空間再構成機能：日本語との対照研究の観点から

通常の発話においては、述語のテンス形式は発話時・出来事時間の時間的位置関係、アスペクト形式は出来事の内的時間構造を提示するわけであるが、発話時以前 (= 過去) において発生、展開された一連の出来事を描写する際には、テンス形式・アスペクト形式が通常とは異なる振る舞いを見せることが、これまでの研究で明らかになっている (Hopper 1979)。典型的な例としては、小説や物語文など、基本的に過去形で語られているテキストの中で使用される、過去の出来事を表す現在形 (非過去形) があげられる。過去形述語文の連続の中にときおり現在形が混ぜられ、使用される現象であるが、この場合、過去の出来事を語っている中で突然現在の出来事に言及されるというわけではなく、過去形で語られる出来事と同じ時点、あるいは時間的枠組み (すなわち発話時以前) において発生した出来事を現在形 (非過去形) が描いていると考えられる。この種の、基本的に過去形で展開される、一連の過去の出来事を描いたテキストを「情景描写テキスト」と呼ぶ。同様の現象は日本語と韓国語にも見られる。

本章の主な研究対象は韓国語の情景描写テキストにおける時制辞の機能である。本研究では Sato, Kumamoto and Sato (2001) が日本語に対して提唱した「時間進展モデル」が韓国語の情景描写テキストにも適用可能かどうかを調査した。

時間進展モデルは、述語を大きく「状態述語」、「動作述語」、「変化述語」の3種類に分け、各述語の過去形、非過去形に情景テキスト内における機能を割り振っている。韓国語の述語をこの方法に従って分類すると、表2のようになる。また、表3は時間進展モデルにおける各述語の機能をまとめたものである。

表2 韓国語の述語分類

述語タイプ	該当する述語
状態述語 (stative predicate)	形容詞、iss-ta (ある／いる)、名詞 + i-ta (名詞 + ダ)、動詞 + e iss-ta/ko iss-ta 形 (「V-テイル」形に相当)
動作述語 (action predicate)	ket-ta (歩く)、nal-ta (飛ぶ)、nol-ta (遊ぶ)
変化述語 (transition predicate)	o-ta (来る)、cwuk-ta (死ぬ)、kyelhonha-ta (結婚する)

表3 時間進展モデル

	過 去	非過去
状態述語	注意の対象が切り替えられる ことを示す	time frame 内の事物／状態につい て描写する
動作述語	話の時間の流れを進展させる	
変化述語	(time frame を形成)	

時間進展モデルにより韓国語の情景描写テキストを分析する具体的な方法であるが、電子化された小説のデータから地の文の文末述語を抽出し、時制辞の時空間再構成機能を考察した。今回の調査ではデータ量 70KB の電子テキストから 361 個の述語が抽出され、うち 333 個 (92.2%) の述語が「時間進展モデル」により説明することができた。この結果により「時間進展モデル」は韓国語にも適用できると評価される。図 1 は時間進展モデルによる韓国語情景描写テキストの分析例である。

3.5 節と 3.6 節では、韓国語に特徴的と思われる現象について、テキストデータから得られた用例を分析し、考察した。3.5 節においては、動作述語の単純過去形が時間進展を行わない場合があることを指摘した。この現象から、副詞句と連携することによって本来の述語の機能が変更されることが分かった。Sato et al. (2000) の中でも、日本語情景描写テキストの中で年代を示す副詞句が情景描写テキストの中で連続して用いられる場合に、述語が本来の機能を果たすことができないことを指摘している。このことと本研究の調査結果を合わせて考えると、韓国語においても、日本語においても、少なくとも一部の副詞句は述語の機能に優先して文の機能を決定する働きをする可能性がある。今後はデータ量をさらに拡大し、この、副詞句が果たす機能に関してさらに詳細に検討する必要がある。

また、3.6 節では日本語には対応する形式が存在しない韓国語 'V-essess-ta' 形について、その用例を収集し、情景描写テキストにおける機能を考察した。そしてその機能として、副詞句と連携した「情景転換」と、一次的に時間軸をさかのぼって、直前まで展開されてきた scene frame の時点以前に生じた出来事・状態について言及する「時間逆行」を指摘した。

以上、本章では、韓国語の情景描写テキストにおける時制辞の時空間再構成機能を明らかにした。言語は一次元的性質を持っているが、人間は何らかの言語的手段を用いて、時間的・空間的広がりのある現実世界を表現している。Sato et al. (2001) と本論文を通して、日本語と韓国語では、その手段として時制辞の交替が大きな役割を果たすことが分かった。

[1]	1: T/p	時間進展	<i>I-kyoli-ka ... ppa-nu kel-um-ulo pataska-lul</i> -NOM 早い-ADN 歩く-NML-で 海辺-ACC <i>hyangha-ye naka-ss-ta.</i> 向かう-CONJ 出ていく-PAST-DECL '李校理が…はやい足取りで海辺に向かって出ていった。'
	2: A/n	事物・状態描写	<i>I-kyoli-ka ... ikoscekos-ul twullepo-ni ..., han kos-un</i> -NOM あちこち-ACC 見渡す-CONJ ある 所-TOP <i>iwus tongli-uy epwu-tul-i ... twulenkeli-o-nta.</i> 隣の 村-GEN 漁夫-PL-NOM さきやく-NONPAST-DECL '李校理が…あちこち見渡すと…、あるところは隣村の漁夫たちが…話し合う。'
	3: S/n	事物・状態描写	<i>..., salam eps-nun kos-i eps-o-ta.</i> 人 ない-ADN 所-NOM ない-NONPAST-DECL (non-past) '…、人のいない所がない。'
[2]	4: T/p	時間進展	<i>I-kyoli-nun ... salam-i eps-nun celpyek-ul chacawa-ss-ta.</i> -TOP 人-NOM ない-ADN 絶壁-ACC 探す-PAST-DECL '李校理は…人がいない絶壁を見つけてきた。'
[3]	5: T/p	時間進展	<i>... patasmwul-ul naylyetapo-nikka hanpen</i> 海-ACC 見下ろす-CONJ 一度 <i>momse-li-lul chi-ko phyelssek cwuceanc-ass-taka</i> 身震い-ACC する-CONJ へたと 座り込む-PAST-CONJ <i>tasi ... sesehi ilese-ss-ta.</i> 再び ゆっくり 立ち上がる-PAST-DECL '…、海を見下ろすと一度身震いをし、へたと座り込み、…ゆっくりと立ち上がった。'
[4]	6: T/p	時間進展	<i>I-kyoli-ka ... mom-ul soschi-lye ha-lcey ku</i> -NOM 体-ACC 上げる-ようとする-COMP それ <i>twi-eyse 'eyheym!' kichimsoli-ka na-ss-ta.</i> 後-から 'えへん!' 咳の音-NOM 出る-PAST-DECL '李校理が…体を飛び上げようとする時、その後から「えへん！」と咳が聞こえた(咳の音が出た)。'
	7: S/p	注意対象切替	<i>... cwuincip ai-ka ... nwunaph-ey se(e) iss-ess-ta.</i> 主人家 子供-NOM 目の前 立つ-RSLT-DECL '…主人家の子供が…目の前に立っていた。'
[5]	8: A/p	時間進展	<i>I-kyoli-nun ... thek-ul chietul-ese celi ka-la-nun</i> -NOM あご-ACC 上げる-CONJ あちら 行く-QUOTE-TOP <i>ttus-ul poi-ess-ta.</i>

図1 時間進展モデルによる韓国語テキストの分析例（角括弧内の数字は time frame の番号）

第4章 韓国語アスペクト形式 V-ko iss-ta の「パーフェクト」用法：文法化の観点から

文法化に関する研究は、動詞などの語彙から文法形式が派生する歴史的経路が存在することを明らかにすると同時に、そのような歴史的派生過程はある特定の言語に固有の現象ではなく、様々な言語の文法形式に広く共通点を見出すことが出来る現象であることを指摘してきた (Bybee et al. 1994)。テンス・アスペクトを表す文法形式についても文法化の観点から盛んな議論が行われてい

る。完成相 (perfective aspect) および過去時制を表す形式の文法化過程については、(7)のような経路が存在することが指摘されている (前掲書：105ページ、一部修正)。

- (7) a. 'be/have' > Resultative > Anterior > Perfective/Simple Past
 b. 'come' > Anterior > Perfective/Simple Past
 c. 'finish' > Completive > Anterior > Perfective/Simple Past

(1)は、いくつかの動詞から「完成相／過去時制」を表す文法形式へ発展していく経路である。このうち、(7a) は存在あるいは所有を表す動詞から「結果状態」を表す文法形式が派生し、それがさらに「パーフェクト」、「完成相／過去時制」へとその意味を変化させることを示している。この経路は汎言語的な研究から導き出された仮説であるが、日本語と韓国語の過去時制辞の歴史をふり返ってみることにしてもその妥当性を裏付けることができる。

- (8) a. 日本語：-テアリ (結果状態相) > -タリ (結果状態相／パーフェクト／完成相)
 > -タ (完成相／単純過去) (Horie 1997)
 b. 韓国語：-어 잇/-어 이시- (-e is-/-e isi-: 結果状態相)
 > -엇-/-에 시- (-eys-/-eysi-: パーフェクト／結果状態相)
 > -었- (-ess-: パーフェクト／単純過去) (He 1987)

しかし、現代韓国語のアスペクト形式について考えてみると、(7)に挙げた汎言語的な文法化経路からは予測が難しい現象を観察することができる。現代韓国語のアスペクト形式 '-ko iss-' が接続した動詞のアスペクト形 'V-ko iss-ta' はおもに進行相を表すが、これが「パーフェクト」を表しているように見える用例がテキストデータの中に見出される。

- (9) 같은 군인 출신으로 아미티지 부장관과 들도 없는 사이인 콜린 파월 국무
 부장관은 비망록에서 그에 대한 첫인상을 이렇게 적고 있다.

Kath-un	kwunin	chwulsin-ulo	Amithici	pwucagkwan-kwa
同じ-ADN	軍人	出身-として	アーミテージ	副長官-と
twul-to	eps-nun	sai-i-n		Khollin Phawel
二人-も	無い-ADN	関係-COP-ADN		コリン・パウエル
kwukmwucangkwan-un	pimanglok-eyse	ku-ey		tayha-n
国務長官-TOP	備忘録-LOC	彼-に		対する-ADN

chesinsang-ul	ilehkey	cek-ko iss-ta.
第一印象-ACC	このように	記す-ko iss-DECL

「同じ軍人出身として、アーミテージ副長官とは無二の友人であるコリン・パウエル国務長官は、備忘録の中で、彼に対する第一印象をこのように記している。」

(10) 80년대 들어 여자박사의 연평균 증가율은 남자박사의 두 배에 달하고 있다.

80nyentay	tul-e	Yecapaksa-uy	yenphyengkywun
80年代	入る-CONJ	女子博士-GEN	年平均
cungkaywul-un	namcapaksa-uy	twu pay-ey	talha-ko iss-ta.
増加率-TOP	男子博士-GEN	二倍-に	達する-ko iss-DECL

「80年代に入り、女子博士の年平均増加率は、男子博士の二倍に達している。」

(9)において、主文述語が‘cek-ko iss-ta’（「記している」）と‘V-ko iss-ta’形をとっているが、この述語によって表されているのは発話時において進行中の動作ではない。(9)において「記す」という動作は、むしろ発話時（すなわち参照時）に先行する時点においてすでに終了した動作であるとなすことができる。また、単純に過去の出来事として述べられるのではなく、発話時の状況と関連付けられながら提示されている。つまり、ここで動詞の‘V-ko iss-ta’形はパーフェクトを表していると言える。また、(10)の主節述語が提示するのは、発話時以前にすでに生じていた出来事である。つまり、「女子博士の年平均増加率が男子博士の2倍に達する」という出来事は、過去においてすでに実現したものであり、発話時において継続中の状況ではない。しかし同時に、この過去に実現した状況は、発話時において筆者と読者の間で関心が持たれ、話題にされているという意味で、発話時との関連付けが行われている。したがって(10)の述語‘talha-ko iss-ta’（「達している」）もパーフェクトを表していると考えられる。本章ではこのようなパーフェクトを表す‘V-ko iss-ta’形に関して記述し、文法化と関連付けて考察を行った。

本章では、テキストデータから得られたデータを提示しながら、韓国語の進行相形式‘-ko iss-’がパーフェクトの意味を獲得しつつあることを明らかにした。しかし、これはまだ一部の動詞と接続した場合に限り現れる意味であり、‘-ko iss-’の意味として完全に定着しているとは言い難い。‘-ko iss-’が接続し、‘V-ko iss-ta’形でパーフェクトを表すのは、現在のところ、報告動詞と一部の到達動詞に限られている。また、報告動詞、到達動詞それぞれの意味クラスの動詞について、‘V-ko iss-ta’形が反復・習慣相を表す際に、文から与えられる様々な条件から発話時以前の出来事が意識されるようになり、発話時の状況に関連づけながら過去の出来事に言及する（現在）パーフェクトとして解釈可能になるという推論が働くことにより意味拡張が発生したことが明らかにな

った。

第5章 結論

本研究では、韓国語のテンス・アスペクト形式の意味・機能について日本語との対照を通して考察してきた。今後は、さらに視野を広げ、言語類型論的視点を導入して研究を進めていくことが、一つの課題であると考えられる。

参考文献

- Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- He, Wung. 1987. *Kwuke ttaymaykimpep uy pyenchensa* (『韓国語時間表現の変遷史』). Seoul: Saymmwunhwasa.
- Hopper, Paul J. 1979. Aspect and Foregrounding in Discourse. *Syntax and Semantics* Vol. 12, ed. Talmy Givon. 213-241, New York: Academic Press
- Horie, K. 1997. Form-Meaning Interaction in Diachrony: A Case Study from Japanese. *English Linguistics* 14, 428-449.
- 伊藤英人. 1989. 「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」. 『朝鮮学報』第131輯, 1-44.
- 伊藤英人. 1990. 「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について (1) -haissda 形について-」. 『朝鮮学報』第137輯, 1-53.
- Nam, Ki-Sim. 1972. 現代國語 時制 ey 關 han 問題 (「現代韓国語の時制に関する問題」). *Kwuke Kwukmwunhak* 55-57. (Nam, Ki-Sim. 『國語文法 uy 時制問題 ey 關 han 研究』 (「韓国語の時制問題に関する研究」), 1-34. ソウル: 塔出版社. 1989. に再録).
- Nam, Ki-Sim and Ko, Yeng-Kun. 1993. *Phyocwung Kukemwunpeplon Kaycengphan* (『標準國語文法論 改訂版』). Seoul: 塔出版社.
- Reichenbach, Hans. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. London: Macmillan.
- Sato, Dai, Keigo Kumamoto and Shigeru Sato. 2001. Reconstructing Temporal Structures in Japanese Scene-Depicting Texts. *Cognitive-Functional Linguistics in an East Asian Context*, eds. Horie, Kaoru and Shigeru Sato, Tokyo: Kurosio publishers, 105-131.
- Se, Ceng-Swu. 1996. *Hyentay Kwuke Mwonpeplon* (『現代韓国語文法論』). Seoul: 漢陽大學校出版院.
- Shirai, Yasuhiro. 2000. The Semantics of the Japanese Imperfective -teiru: An Integrative Approach. *Journal of Pragmatics* 32, 327-361.
- Soga, Matsuo. 1983. *Tense and Aspect in Modern Colloquial Japanese*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Sohn, Ho-Min. 1999. *The Korean Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vendler, Zenon. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

論文審査結果の要旨

本論文の目的は、韓国語の新聞コラムなどのテキストデータに基づいて作成したコーパスの調査を通じて、韓国語の、時間を表現する文法形式である「時制（テンス）」（現在・過去・未来等）・「アスペクト」（完了・進行等）の形式（接辞・構文）の、従来の研究では解明されなかった時間表現上の機能を、日本語の対応する形式と対照しつつ明らかにすることにある。

韓国語の文法形式は、表面的には日本語の文法形式と機能的な類似性が非常に高いが、詳細に比較すると様々な興味深い相違点が存在することが知られている。本論文は、従来の研究では十分に行われていなかった電子化コーパスの実例検索という手法を用いて、テンス・アスペクト形式に関しても韓国語と日本語の間に興味深い対照が存在することを実証しており、韓国語学、日韓対照言語学の分野に重要な貢献をなしている。

本論文の中心をなす第三章「韓国語時制辞の時空間再構成機能：日本語との対照研究の観点から」においては、韓国語の小説の電子化コーパスに基づいて、小説の情景描写部分において用いられているテンス形式の過去形、現在形が、小説の出来事の時間の進展に関してどのような機能分担を見せるかを、日本語のテンス形式の機能分担と比較しつつ示している。韓国語のテンス形式は日本語のテンス形式と総じて類似性が高いが、いわゆる大過去形が存在している点を始め、興味深い相違点があることが指摘されている。

第三章とともに本論文の最重要部分をなす第四章「韓国語アスペクト形式 ‘V-ko iss-ta’ 形のパーフェクト用法：文法化の観点から」では、従来の韓国語学の研究では十分に記述されていなかった ‘ko iss-ta’ というアスペクト形式の「現在完了」用法をコーパスの実例に基づいて指摘し、さらにその用法がまだ完全に定着しておらず、特定の動詞にのみ限られている実態を文法化（grammaticalization）という観点から解明した。本章において提示されている言語事実の指摘および分析は、韓国語学の分野に重要な貢献をなすものとして高く評価できる。

以上、本論文は、韓国語のテンス・アスペクトという文法形式の持っている文法機能に関して、電子化コーパスの実例調査と日本語との対照に基づいて、従来の研究では十分に解明されていなかった時間再構成機能（テンス形式に関して）や、現在定着しつつある新しい用法（アスペクト形式に関して）を指摘し、韓国語学の分野にオリジナルな貢献をしている。このことから著者は研究者として自律的な研究活動を行っていく十分な能力を有しているものと認める。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。